熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	文話一則 ： 雜録
Author(s)	化々山人
Citation	龍南會雜誌，４１： ２４-２５
Issue date	1895-12-17
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4721
Right	

Kumamoto University

雜錄

文話一則

化々山人

前の雜誌に、硯友會員某の說に、詩を賦し、歌を詠ずるは、唯雜歌の錬習に止まらず、文章にも影響することと大なり、その措辭の巧妙、造語の精錬は、詩に資ること多く、語調の流麗、餘韻の嫋々たるは、歌に資ること大なり云々、文章の詩歌に資る、その間に一講渠を劃したるは、語弊なきにはあらざれども、是おのづから我輩の語なり、余常に文章を敎ふるに、餘力を詩歌に用ひさするも、その意茲にあり、蓋詩歌、その致一なり、造語の精錬措辭の巧妙は、歌に資ることも多く、語調の流麗餘韻の嫋々たるは、詩に資ることも大なりとやいはん、槩論すべきにハあらじ、詩は姑く置く、今歌に付て、その一話を擧げん、新古今集雜下、百首歌に、式子內親王、暮るゝまも待つべき世かは、あだし野の末葉の露に嵐たつなり、尾張の家苞、暮るゝ間とは、露は夕の物なる緣なり、あだし野は、化なる意にとる、嵐たつなりと詠給へるは、露の今消ぬんとするさまなり、嵐の吹立て露のきえんとするをみて、世の人の命も、此露の如くにて。無常の風の吹來なば、暮るゝまでをも待べきにあらず、今も消えなん物をとなり、二ノ句のかはといへる詞、世人を深く戒めたる意なり、四ノ向草葉といはで、末葉といへるも、露の危きことを强くいへるなり、嵐吹くといはで、たつといへる、俄なるさまなり、吹くにてハ、のどかなり、すべて、歌は、一首の趣にしたがひて、聊の事にも、心をつけて、詞をつかふべきなり、といへり、以てこの一斑を知るべし、固より歌にハ、平語を用ふるもあり、錬句ばかりの者のみにはあらず、され

ども、名歌には必錬句の多きものなり、盧延遜が苦吟の詩に、莫話詩中事、詩中難更無、吟安一個字、撚斷數莖鬚、險覓天應悶、狂搜海亦枯、不同文賦易、爲著者之乎、是ノ詩、々作の苦を說盡せり、歌に於ても亦かり、深更一辭を安じわづらひて、數莖の鬚を撚斷すること幾回ぞ、此の如く錬磨工夫を積む、故に一篇の文をかくにも、筆とれば、やがてこの錬磨工夫の一點に、亦らず〳〵精神は注ぐなり、精神をして茲に注がしむるは、詩歌の勢なり、文章の詩歌に資ること大なりといふは、この故なり、されども、その境に至りたる者ならでは、この味知れがたし、

印度の宗教（上）

巴城生

歷史以前、中央亞細亞の裏海に瀕せる高原に一の人種あり。自ら呼んでアリヤン人種と稱す。高貴なる血族の義なり。是れ實に後世のアリヤン人種、及び印度歐羅巴人種（卽ち希臘羅馬印度の人民）の祖先なりとす。何れも或は哲學により、或は儀禮によりて、眞理を求め、安心を得んとせり。

當時、猶太人は正に撒攬山より巨材を採伐して、以て彼の宏大なる殿堂を建設せんとせる時なりしが、アリヤン人種の文明も、之に比して大に劣る所あらざりき。政治整頓し、居住安全に、農業行はれ、水車織物器械陶器一として用られざるなく、金銀の貨幣流通し、銅製の武器備はれり。實に彼等は、紀元前千二百年に於て、既に叙事詩を吟詠したりき。亦以て文物彬々たるものありしを知るべし。

彼等が一神を禮拜せるハ、其最古の傳說に、

彼の外に神あることなし、